

学的治療でもやはり非常な困難をきたします。しかし、全ての疾患に対して完治させることはなかなかむずかしいにしても、いい方向に持っていく、例えば自覚症状が少し軽くなるとかいう様に、あらゆる病気に対応出来るものがあるという事を考えております。それから、癌とかリウマチとかパーキンソン症候群といった難病の治療に何とか西洋医学と手を組んで救っていく事ことは出来ないかという事を考えております。それからもう一步前進しまして、健康の増進、病気の予防、あるいは体質の改善といったものに、東洋医学的な治療法が役立たないものかという事を考えております。それから最後に Quality of Life の向上であります。生活の質を高めるという事が今、非常に言われております。生活が豊かになってきましたので、ただ生きているだけではつまらない。生きているからには、生活の質を良い状態で保っていかなければならないと言われております。人間の寿命はだいたい100年あります。というのは哺乳動物の寿命というのは成長期の4〜5倍といわれています。人間は20才まで成長しますから、5倍しますと、100才という事になります。100才ある寿命を不摂生をして寿命を削って、皆さん100才まで生きられないという事です。40才頃になると、病気をします。そうするとベッドに縛りつけられて生活の質はドンと落ちます。治ってまた社会復帰しても元のレベルまでは戻れないで、生活の質が落ちてしまうといった事を繰り返しまして、だいたい最近ですと80才位まで生きながらえるという過程を辿る訳ですが、これではどうもうまくないという事で40才以降も生活の質を同レベルで保ち、80〜90才位でストッと死ぬというのが一番理想的な人生でありまして、これを直角型人生と名付けております。医学の最終目標は直角型の人生を皆さんが辿るという事に尽きる訳です。そして直角型の人生を送るために、予防的に30才位から東洋学的な知識を利用してやっていこうじゃないかという考えがあります。これは現に、中国で盛んにやられております。中国は非常に人口が多いためにお金がかけられない訳です。皆に薬なんか飲ませていたんでは国家財政が成り立っていかないものですから、気功法とか、針なんか一本あったら一生使えますからその様なお金のかからない方法で Quality of Life を高めようとしております。その事を抗老といっております。中国も日本の例にもれず高齢化社会を迎えようとしておりますので、今中国の学者たちは必死になって抗老という事を勉強しております。中国は非常に人口が多いものですから何か一つ良いと言われた事を試すにしましても、非常に多人数の人に試せる訳です。日本では、30例とか50例を試してどの位効いたという事が学会で発表されたりする訳です。パーセントという言葉をよく使いますが、母集団が100ないとパーセントと言えない訳ですが、中国では100などは少ない方で1000とか、多いものになりますと30000人にやってみたといった治療報告がありますから非常に参考になる訳です。ですから、是非中国で試してくれたものを、ありがたく頂戴して日本の皆さんの健康に役立てなければと思っています。さて、直角型人生を送られた方が最近おられます。中川一政という洋画家であります。この先生はついこの前、98才の誕生日の一週間前に亡くなられました。亡くなられる1ヶ月前まで絵を描いておられました。私は縁がありまして十数回治療に伺った事がありますが、この方なんかは非常に Quality of Life の高かった方だろうと思います。これから日本は超高齢化社会を迎えますので、早急にそういう対策

稲田憲治君 昨夜、1日遅れの妻のバースデイのお祝いにとレストランで食事をしました。お祝いの品物は？と聞きましたら、だまって目をふせました。今日は久々につかれております。

石川勝行君 今年の風邪のうち何回かは漢方「カッコントウ」でなおしました。今日のお話はたのしみにしております。

堀川正幸君 良いお天気に感謝。／

丸山誠一君 三条ミュージックキャンプの成功を祈って。／

白崎哲男君 協力して。

吉川吉彦君

石月雅司君 ボックスに協力。

阿部誠一郎君 ボックスに協力して。目標達成しますように。

米山忠俊君 BOX協力して。

卓 話： 「西洋医学と東洋医学」小出医院院長 小出健一先生



本日は三条で大活躍をしていらっしゃる忽々たる皆様の活発なお集りにお招き頂きまして大変光栄に存じます。非常に膨大なテーマではありますが、時間が限られておりますので雑ばくな話しか出来ませんがお許し頂きたいと思ひます。西洋医学と東洋医学という事でお話を申し上げますが、西洋医学は出来あがりましてからすばらしい発展をしている訳ですが、たかだか100年位の歴史しかない訳で、西洋医学が出てくる前はそれぞれの国におきまして西洋医学的でない治療で皆さんの健康を守っていたという事になります。最近の各国の風潮と致しまして、自分の国の伝統医学というものを見直そうという気運が世界各国で起こっております。その原因については色々ございますが、やはり西洋医学的な治療法でうまくいかない様な病気があるという事が一番大きな原因になっているのではないかと思います。例えば、ヨーロッパにおきましてはハーブというものがあります。特にドイツでは立派な博物館がありまして、昔使っておりましたハーブ、つまり色々な薬草が立派な焼物の壺の中に保存されて飾ってあります。それからインドではアーコルヴェーダという、インド独特の医学があります。これは、中国の方に仏教と共に伝えられまして、中国の伝統医学に非常に影響を与えております。我が国はと申しますと、間瀬道三が中国に勉強に行きまして、金、元の医学を日本に伝えた訳ですが、それ以前は日本古来の医学がありまして、それが「大同類聚方」という本にまとめられております。これは808年に勅命によってまとめられた本ですが、神社とかお寺などに伝えられました薬方をまとめているものです。そのように、各国の伝統医学が見直されて皆さんの健康あるいは病気の治療に役立たないものかという様な気運がある訳です。それでは西洋医学と東洋医学はどの様に違うのかと言いますと、世界各国に色んな伝統医学がありますが、例えば古くはアメリカンインディアンの療法などもその1つです



が、やはり中国の伝統医学が非常にすぐれている訳です。そこで東洋医学と言いますと中国の伝統医学あるいは間瀬道三が日本に伝えた所謂漢方を指すと考えて良いと思います。西洋医学はどのような特徴があるかと言いますと、お配りしましたレジメにあります様に解剖とか生理学、病理学といった科学に基づいて発展した医学と言えます。それは非常な進歩を遂げ、西洋医学のおかげで寿命が延び、難病から救われるという様な大変ありがたい恩恵をこうむっている訳です。西洋医学で特記すべき事は顕微鏡の発見と、それにより病原菌を見つけてそれをやっつける抗生物質という薬物を発見したという事で、これが西洋医学の2つの大きなすばらしい発見、進歩であります。西洋医学ではどの様に診断するかと言いますと勿論、医者が五感を使いまして患者さんの訴えを聞いたりあるいは打聴診したりする事もさることながら、臨床検査という事が非常に重視されます。病気の原因を細かく細かくつき詰めていきまして、今では身体を構成している細胞の中まで入り込みまして、核の中にある遺伝子DNAのどこが、どういうふうに具合が悪くなっているのかといった事まで解るようになってきています。非常に分析的であります。そして、その臨床検査の結果をふまえてあなたは何という病気であると診断を下す訳です。診断がつきますと、その病気の悪い部分を治そうという治療法に移る訳です。言い換えれば、悪い所に攻撃を仕掛けるという様な治療法であります。治療手段としましては、科学的に合成された薬品、悪い所を切り取るという手術的な治療法が主だったものになります。一方、東洋医学、特に中国の伝統医学はどのようなものかと言いますと経験の積み重ねです。腹の痛い時にあの薬草を飲んだら、例えば黄連の根っ子をかじったら具合が良くなったという様な経験の積み重ねがありまして、それに自然哲学、つまり人間というのは自然の中に生きているものでありますから、人間の身体も自然と同じ様なものであるといった考えに基づきまして、人間の生理を説明しようとしている訳です。陰陽五行説という様なちょっと聞きなれない言葉かもしれませんが、自然哲学を人間の身体、病理、生理の中に持ち込んでいるという事が言えます。漢方が栄えた頃には血圧計も体温計もございません。全て医者の五感のみで診断をする事になります。五感による診断とは、望、問、聞、切、診を言います。望というのは背伸びをして望み見るという事ですから、患者さんの全体の様子を詳しく観察する事です。問診というのは西洋医学でもやっております。非常に重要な事です。患者さんの訴えをよく聞くという事です。聞というのは、臭いを嗅ぐ事です。香道でお香を聞くと申しますが、医者の嗅覚を使って診断の助けになる情報を得る事です。切は親切の切で懇ろにするという意味ですが、これは医者の手を患者さんに触れて情報を得ようという事です。それらの診察の結果、得られた情報を分析するのではなく統合して診断をする訳です。どの様に統合するかという事です。人間の身体は気・血・水の3つから出来上がっていると考えます。この気・血・水の流れ、あるいは存在が人間の身体の中でバランス良くある、あるいはうまく流れているという状態ですと病気にならないと考える訳です。医者の五感によって得られた情報を統合しまして、この患者さんは気の具合が少し悪くなっているのではないか、血が悪いんじゃないか、あるいは水の具合が悪いんじゃないかという事を判断します。次に五臓六腑という概念があります。うま酒が五臓六腑に染みわたるなどと言いますが、心臓、肝臓、

腎臓、脾臓あるいは胃とか大腸、小腸とか名前は同じですが東洋医学では臓器そのものを指すのではなくて、臓器の機能を含めて呼ぶ訳です。その臓腑の働きのどれがやられているのかを判断します。次は治療に移る訳ですが、東洋医学でとる治療法はバランス療法というものです。人間の病気は身体のバランスの崩れであると考えます。バランスの崩れを治してやれば人間の自然治療能力が復活しまして、それによって病気が治るという考えが主体になります。その治療のためにどういうものを使うかと言いますと、生薬例えば草の根っ子とか木の皮、また動物ではあぶとかゴキブリの一種とか、せみの殻とか、あるいは鉱物の生薬など天然のものに、修治（しゅうち）といいまして、少し加工しまして熱を加える訳ですが、毒性の強いものを無毒化したりする操作をする訳ですが、ほとんど自然のものに近い状態で使います。それを煎じて飲むものを湯液（とうえき）と申します。スープです。これが所謂漢方薬というものです。東洋医学は薬だけではありません。針灸とか按摩導引というものがあります。按摩はマッサージです。導引は足を上にあげるという意味ですが体操の様なものです。導引というのは吐納（とのお）とも言いますが、息を吐いたり吸ったりする事です。要するに呼吸法ですが、それを組み合わせて治療をする訳です。先日、京都におきまして日本医学総会がございまして、漢方が非常に注目されてその報告がなされました。報告をされたのは大学病院の教授の方々が多かった訳ですが、どの様に考えているかと言いますと、これから東洋医学的な治療法をいかに役立てて行くのかという事を考えておられます。ある製薬会社から漢方薬の煎じ薬をフリーズドライにしました。ぐつぐつ煎じなくてもよいものが出ていますが、それをもらいまして患者さんに使ってみました。例えば西洋医学的に難渋している疾患、気管支喘息でありますとか、アトピー性皮膚炎でありますとか、更年期障害でありますとか、リウマチといったものに使ってみた訳です。副作用がないから使ってみてくれと頼まれて、半信半疑で使ってみた訳です。そうしますと、思いの外良く効いたという報告がほとんどありました。教授の方々は、東洋医学をどの様に今日の治療の中にとり入れていこうかと考えているかと申しますと西洋医学的にいろんな検査をやっても何も引っかからない、診断がつけられない。ところが患者さんの訴えは残ってしまうという、教授達にとっても困ってしまう病気に、何か東洋医学的な早く言えば漢方薬が何とか使えないかと考えています。それから診断はついたけれども、なかなか治療法がうまく行かないといった時に、一つの逃げとして漢方薬を使おうじゃないかという様な事を考えています。あるいはまた、これは非常に大事なんですが、西洋の科学的に合成された薬の副作用を漢方薬でなんとか防止できないだろうかという事を考えています。これについては非常に有望でありまして、ステロイドホルモンという大変すばらしい薬がありますが、この薬が無いと治らない病気がいっぱいあるんですが、両刃の剣でありまして副作用も強く出るという代物であります。その副作用を軽減してくれる働きがあるという事がかなり解っております。そんな風に使っていこうという事を大学病院の教授達は考えております。これは大変役に立つ事でして、それはそれでいいと思うんですが、我々永年東洋医学を勉強してきている者はどういう風に考えているかと申しますと、東洋医学といえども勿論オールマイティではありませんから、西洋医学で難渋する疾患につきましては、東洋医